

図書館展示10月●2004

喜びの島
シテール島

神話・美術・文学そして音楽

期間●10月4日-11月6日

場所●図書館ブラウジングルーム

喜びの島 シテール島

～ 神話・美術・文学そして音楽～

はじめに

ギリシアの愛と美の女神アプロディテ（ヴィーナス）が海の泡から誕生し、西風ゼピュロスに運ばれてたどり着いたとされる伝説の島、シテール島…。愛と快楽の島として、古来、美術や文学のテーマに数多く取り上げられてきました。

音楽ではどうでしょうか？すぐに思い浮かぶ作品は、ヴァトーの絵からインスピレーションを受けたとされるドビュッシーの『喜びの島』ですが、情報端末で grovemusic.jp の Works を検索してみたところ、“Cythere” というキーワードを持つ作品が 51 件も出てきました。残念ながら、当館には所蔵していないものが多かったのですが、テーマとしての関心の深さがうかがい知れます。

今回の展示では、ドビュッシーの『喜びの島』を中心に、シテール島をテーマとした絵画・文学、そして音楽を当館の図書館資料の範囲でパネルや資料展示でご紹介したいと思います。また、当館の貴重資料の中に、オペラ・コミックの資料があることを発見しましたので、ご紹介しましょう。

さらに、源泉となったギリシア神話をたどり、どのような伝説の島なのかを探ってみたいと思います。

なお、当館に所蔵しない資料について、武蔵野美術大学美術資料図書館にご協力をいただきました。心より御礼申し上げます。



contents

ギリシア神話をたどって	2
ヴァトーと「シテール島」	4
ドビュッシー『喜びの島』	6

展示資料

図版パネル	8
展示図書	11
展示楽譜	16



企画・解説 市川啓子（国立音楽大学附属図書館閲覧参考部）

ギリシア神話をたどって～ヴィーナス誕生とシテール島～

ギリシア・ローマの神話は、現在まで欧米の人たちに自分たちの神話として愛され続けてきました。文学や美術の作品の中に、しばしばテーマとして取り上げられています。古代から現代まで、世界中の人々を魅きつけ続けてきたギリシア神話の世界を知り、味わうには、どのような資料があるでしょうか？

参考図書室には、『ギリシア・ローマ神話辞典』、『図説 ギリシア・ローマ神話文化事典』ほかの事典類もありますが、とくに一読をお勧めしたいのが、吉田敦彦著『ギリシア・ローマの神話 人間に似た神さまたち』です。ホメロスとヘシオドスという二大詩人の作品だけでなく、紀元前1550年ごろのミュケネ文明にもさかのぼって調べた上で、読みやすく物語られています。ここで、吉田氏の本より、ヴィーナス誕生とシテール島に関する部分を引用させていただきます。

・天地創造の神話～天地のはじまりと泡の中で生まれた美女

世界のはじめに、この世のあらゆるものとすべての神々に先立って、最初に生まれたのはカオスでした。カオスというのは、その内部ではあらゆるもののあいだに何の区別もなく、すべてが混沌と混じりあっている巨大な淵で、現在でも世界の果てに、口を大きく開いています。…(中略)…

次に生まれたのは、ガイアと、タルタロスと、エロスでした。ガイアは、私たちがその上で暮らしている大地です…(中略)…

大地女神のガイアは、まず最初はだれとも夫婦にならず自分だけの力で、天ウラノスと、高い山々と、海ポントスを産みました。…ウラノスとポントスは、どちらも男の神さまです。

それからガイアは、息子の天ウラノスと結婚しました。この結婚によって、ガイアが最初に産んだのは、ティタンたちと呼ばれる、男女六人ずつ、合わせて十二人の神さまたちでした。

ところが、そのあとでガイアは、恐ろしい怪物の息子たちを産んだのです。…(中略)…

この不気味な息子たちを見て、びっくり仰天したのは、彼らの父親のウラノスです。自分が王として支配している世界に、こんな連中にいられては困ると思ったウラノスは、…(中略)… 身動きできぬようにしばり上げ、母の腹の中にもどし、地底に閉じ込めてしまいました。

するとこの仕打ちに対して、憤慨したガイアは、腹に重荷を押しこんで自分を苦しめ、息子たちをむごい目にあわせたウラノスに、てひどい仕返しをしてやろうと決心しました。…(中略)…

「かわいい子どもたち、おまえのうち、だれでもよいから、この刃物を使い、私が教えるとおりにして、あのひどいお父さんのウラノスに、罰を与えてやっておくれ。その勇気のある者は、お父さんに代わって、この世界の王になることができるのだよ」…(中略)…

「その役を、自分が引き受けましょう」

と申し出た者がいました。それはクロノスで、彼はティタンたちの中で、いちばん年若だったにもかかわらず、力でも知恵でも、兄弟の中でもっともすぐれていたのです。…(中略)…

そんなことは夢にも知らぬウラノスは、そのうちにまたガイアを抱擁しようとして降りてきて、大地の上ですっぽりとおおいかぶさろうとしました。その瞬間にクロノスは、左手で父の性器をつかみ、右手に持った鎌でその肉を刈り取ると、肩越しに背後へ投げ捨ててしまいました。

肉塊は、海へ落ちましたが、何しろ、不死の神さまの体の一部ですので、朽ちることがけっしてありません。生命を保ったまま、長い年月のあいだ、海面に浮かび漂いつづけました。そのうちに、その肉塊から、白い泡

がわいて出ました。そしてやがてその泡の中に、一人のえも言われぬほど愛らしい女の子が生まれ、泡に入ったまま海上を、波のまにまに運ばれながら、絶世の美女に成長しました。これが、美と愛の女神アフロディテです。

そのうちに、西風の神さまのゼビュロスが、この泡に息を吹きかけ、東へ東へと吹き送りはじめました。泡は、ギリシア本土の南の沖を通り過ぎ、なお海上を東へ運ばれつづけて、しまいには地中海の東の端にあるキプロス島の海岸に着きました。そこでアフロディテは、まばゆい裸身のまま泡から出て、ばら色の足ではじめて地面を踏みました。そうすると、女神のやわらかな足の触れた地面に、たちまち緑の草が生え、美しい花が咲き乱れました。

そこには、美しい季節の女神のホラたちが、これから自分たちの女主人になるアフロディテに、さっそくお使いしようとして、うやうやしく出迎えにきていました。彼女たちは、急いでアフロディテの裸身に、用意してきた春の花のいっぱい縫い取りされたかぐわしい神の衣を着せました。…(中略)…

こうして着付けがすっかり整うと、ホラたちは、アフロディテを、天上で待ちかまえている神々のところへ、案内しました。そうすると、…(中略)…愛の神のエロスが、仲間の欲望の神のヒメロスを連れてやってきて、天上へ向かうアフロディテのお供をしました。このときからエロスは、アフロディテを、まるで自分の実の母親のように見なして、息子のように彼女に孝行しながら、いっしょに暮らすことになったのです。

以上の引用で、「アフロディテ」と名づけられている女神が、私たちの「ヴィーナス」です。「泡 (aphros)」を語源とするギリシア名で、「アプロディテ」と呼ばれることが多いようです。ラテン語名はウェヌス、その英語読みが「ヴィーナス」です。この本では、キプロス島にたどり着いたとされていますが、『図説 ギリシア・ローマ神話文化事典』では、「キュテラまたはキプロス島に流れ着き…」とあり、両方の島に女神が祭られているとのこと。この事典の「キュテラ」という項目に、「“CYTÈRE” (仏: シテール): ペロポネソス半島とクレタ島との中間にある島。アプロディテが海の泡から生まれたときに、ゼビュロスに運ばれてたどり着いた島だとされる。」とあります。「シテール」というのは、この島のフランス語読みで、この島に関心を寄せるのは、圧倒的にフランス人が多いことがわかりました。現在の地図で調べると、ペロポネソス半島の南に小さな“KITHIRA”という島があり、この島のことを指すと思われる。

なお、上記の伝説は、ヘシオドスの説ですが、ホメロスでは、アプロディテは、ゼウスとディオオーネーの娘とされています。

いずれにせよ、奇想天外で、興味尽きない物語です。展示終了後、この物語をゆっくりと読み進めてみてはいかがでしょうか。

参考文献

『ギリシア・ローマの神話 人間に似た神さまたち』吉田敦彦著(ちくま文庫) < J95-029 >

ヴァトーと「シテール島」

ヴァトーの描いた(シテール島への船出)は、西洋美術史上あまりにも有名であり、愛の島シテール島(キテラ島)の名前は、まさにヴァトーの絵画と不可分に結びついていると言っても過言ではないでしょう。しかし、この画家について、また、この絵について、私たちはどの程度知っているのでしょうか？ここで、当館の資料と武蔵野美術大学美術資料図書館からお借りした資料を参考に、わかった範囲でご紹介しましょう。

ジャン・アントワーヌ・ヴァトー/ワトー Jean-Antoine Watteau(1684-1721)は、ヴァラシエンヌという小都市で生まれました。この都市は地理的にベルギーとフランスの境界域にあるため、繰り返し戦場になっており、ヴァトーの生まれる数年前、1678年にスペインからフランスに統治権が渡っています。刺繍や金属細工、陶芸などが盛んで、父親は屋根職人の棟梁でした。

武蔵野美術大学美術資料図書館蔵「ヴァトー全作品」(中央公論美術出版社 1991)の編著者中山公男氏によれば、「36歳という若さであわだしく世を去った割には、早くから多く論じられてきた画家である。...しかし、いまだに作品の年代的な展開、制作年代の決定に関して、統一的な見解すらないのが現状だといってよい。...同じように、彼の伝記的な事実についても、彼の人となりについても、無数の言葉にかかわらず、十分な確証となるものは必ずしも多くはない」とのことです。友人たちの証言を総合すると、「身体的には虚弱に近い。性格は内気、控えめで、人嫌い、どこか牧人のような素朴で孤独な趣がある。純粹すぎるほどの心の持ち主で、絵画のことしか考えていない。...」といった肖像が浮かび上がってはきますが、かなり謎に満ちた人物だったようです。

1702年、18歳の時パリに出て、やがて、画家、版画家、装飾画家であり、劇の衣裳や舞台装置まで手がけたクロード・ジロー Claude Gillot のアトリエに入ります。その後、装飾画家クロード・オードラン Claude Audran³世(1658-1734)の許に助手の一人として入り、新しい世界を開くこととなります。1709年に一旦故郷に戻った後、1712年、パリに戻りアカデミーに何点かの作品を提出、アカデミーは即座に入会資格作品を提出するよう命じました。この資格のために大幅に遅れて1717年に提出された作品が、有名な(シテール島への船出)です。

ルイ14世時代の末期、人々は「壮大な趣味」にも、終わることのない戦争にも倦み果てており、壮大さではなく小さな愛らしさを、古典的な明確さよりは情緒の動きを求めていました。こうした時代の要請に応える唯一の画家として、アカデミーは彼の傑出した才能を認め、「雅宴画^{*}の画家」という新たな称号を与えました。

夢想的な楽園のイメージ、「愛の巡礼」、「素朴な恋」というテーマにヴァトーは早くから関心を持ち、その表現を何度も試みていました。具体的に「シテール島」を標題に持つ作品は、3点あります。

第1作目は、1709-10年頃描かれたとされ、現在フランクフルトのシュテューデル美術館蔵の作品(シテール島)です。「シテール島」つまり伝説の愛の島のテーマの発想源として、ダンクール Dancourt(1661-1725)の『三人の従姉妹』が取り上げられています。1700年10月、フランスの劇場で初演されたこの演劇には、次のようなセリフの場面があるそうです。

* 庭園や田園での優雅に着飾った男女の集いを描く絵画様式

シテール島へ あなたとともに
巡礼に行こうよ そこから恋人なしで
夫なしで帰ることなどないのだから

また、当時、この種の「愛の巡礼」が、音楽や文学などで多く取り上げられ、夢幻化の中で生きようとする18世紀人の精神様態が、流行として表れていたとのこと。ヴァトーの天才的な創意の発露は見られますが、衣裳や人物の固さや構図が青年期を想定させる作品です。

第2作目が1717年8月28日にアカデミーに提出され、受け入れられた作品で、現在パリのルーヴル美術館にあります。最初、〈シテール島の巡礼〉と名づけられ、次に〈雅びな宴〉に変更されました。しかし、1775年に、アカデミーの役員であったシャルダンがアカデミー所蔵作品カタログを作成したときに〈シテール島への船出〉と題したため、その誤解が19世紀にそのまま受け入れられ、その題名でこの絵が知られているのが現状です。ルーヴルのラベルも実際には〈シテール島への船出〉となっています。前作に比べて、人物の表現様式に大きな変化が見られ、きわめて繊細な動きと感情の機微が表現されているのがわかります。1961年に発表されたマイケル・リヴィー M. Levey の論文で、この絵のテーマがシテール島への船出ではなく、愛の島からの帰還のための乗船であると論じられ、賛否両論、大論議が巻き起こったそうです。中山公男氏によれば、「画面右方には、ばらの花かずらにおおわれたヴィーナスの彫像が立ち、ここが愛の島キュテラ(シテール)であることを示している。…この画面の革新的な役割を見る限り、シテール島からの帰りであることは明らかである。つまり、それは愛の始まりではなく、終わりを暗示していることになる。」とのことでした。

第3作目は、ヴァトーが友人ジャン・ド・ジュリアンヌのために描いたとされる前作のヴァリエントで、現在ベルリンのシャルロツテンブルグ宮殿にあるものです。基本的な構図は同じですが、ヴァリエントであるためのためらいのない素早い塗りのために、かなり色彩的な効果は異なっています。そして個々の部分で自由な模様替えがなされています。右端のヴィーナス像が生身の彫像風のものとなり、キューピッドたちのまとわりつくカップルとばらの花を手にするカップルが加えられています。さらに、前作では、恋人たちの乗る船はゴンドラ風ですが、こちらでは、船の上に帆柱が立ち、キューピッドたちがピンクの帆を上げようとしています。題名は、〈シテール島への船出〉となっていますが、果たして両者は同じ主題であるのか、それとも、ルーヴルのものが「シテール島への船出」であり、ベルリンの方が「シテール島からの船出」であるという仮説もたちうるのか、多くの疑問が解決されないままに残っているとのことでした。

美術史家たちの論争はともかく、これらの美しいヴァトーの絵は、ひとつの「幻想」として、そしてアレゴリーとしての「愛の島」が描かれていることは事実で、私たちが愛の夢幻の世界へと誘ってくれます。

参考文献

- 『ヴァトー全作品』 中山公男編著 (中央公論美術出版社 1991) <武蔵野美術大学美術資料図書館蔵>
 - 『世界美術大全集 西洋編 第18巻 ロココ』 坂本満編(小学館 1996) <R708/SB/18>
 - 『ヴァトー [シテール島への船出] 情熱と理性の和解』 ユッタ・ヘルト著 中村俊春訳(三元社 2004) <J102-328>
- *****

ドビュッシー 喜びの島

クロード・ドビュッシー Claude Debussy(1862-1918)作曲、(喜びの島) L'Isle joyeuse は、1904年8月に完成され、1905年にパリの国民音楽協会で、リカルド・ヴィニエスによって初演されました。生き生きとしたリズムと和声的な色彩に富み、ドビュッシーのピアノ曲の中で最も外交的な性格を持ったものの一つとされるこの作品は、ヴァトーの絵画(シテール島への船出)から靈感を受けて創られたものとされています。しかし、ヴァトーの絵との関連については、さまざまなとらえ方があるようです。

E.ロバート・シュミッツ著 大場哉子訳『ドビュッシーのピアノ作品』によれば、「たしかにこの作品は、ヴァトーの絵にある楽しさ、興奮、官能的な雰囲気にあふれているが、音楽は生き生きとしており、一時たりとも、絵のキャンバスに固定していない。さまざまなリズムの交錯するさまは、まさにバックス的などんちゃん騒ぎである。それは、もはや<シテール島への船出>というよりは、むしろ女神ヴィーナスの寺院をとりまいての、<シテール島での飲めやうたえのどんちゃん騒ぎ>である。<愛の島>の恍惚感が作品にみなぎっており、それは勝利の舞踏のリズム、女神をたたえる輝かしいファンファーレへと結集していく。これは、まさしく喜びの島であり、<愛の神>に対する賛歌は、ごくわずかな病的なもの影にさえ、そこなわれることはない。」

また、スイス人 Dietschy によって 1962年にフランス語で著された本“La passion de Claude Debussy”の英語訳“A portrait of Claude Debussy”では、「ヴァトー作『シテール島への船出』とは表現されている世界が大きく異なり、むしろ、1902年にサロンに飾られていたベナール作『幸福な島 Ile heureuse』に類似している」と書かれており、ヴァトーの絵から靈感を得たという定説に疑問が投げかけられています。残念ながら、ベナールのこの作品については、追求しきれませんでした。

今回、この展示を企画するきっかけとなったのは、利用者からの「ドビュッシーが靈感を受けたとされる絵を見てみたい」というレファレンスの要望でした。当館に所蔵する資料だけでは足りないようだ、ということで武蔵野美術大学の図書館に大変お世話になりましたが、ヴァトーの絵そのものが3種類もあり、そのテーマも「シテール島への出発」なのか「帰還」なのか? 「愛の始まり」なのか「愛の終わり」なのか? ...等々、謎が深まるばかりでした。そこで、実際に展示で紹介し、また、絵の源泉となったギリシア神話の世界も知っていただければ...と考えた次第です。

ドビュッシーは、創作のきっかけとなったさまざまな刺激から、対象を描写するというよりは、刺激がつくりあげる情緒によって合成して、音楽表現に結実させていった人です。ヴァトーの絵から、どのように音楽を創り上げていったのか、絵を見ながら思いを馳せてみてはいかがでしょうか。



ここで、〈喜びの島〉を作曲した当時のドビュッシーの私生活を垣間見てみましょう。

1903年、パリ音楽院に、ラウール・バルダックという、作曲家志望の学生がいました。彼はドビュッシーに傾倒し、その教えを私的に受けもしたようです。父親は、銀行家シジモン・バルダック、母親エンマは、ポルドーのモイーズ家の出で、素人ながら美しい声のすぐれた歌手でした。彼女は、息子の師であるドビュッシーとその夫人を晩餐に招待しました。エンマは、優雅な美しさにつつまれ、年齢は妻リリーより10歳以上も上ではありましたが、容姿に加えて知性と豊かな教養が、接する人に好ましい印象を与えずにはいなかったといえます。やがて、ふたりは、愛し合うようになります。エンマにおいてドビュッシーは、自分の全存在をかけて愛する女性を、はじめて見出したのでしょう。彼には「可哀そうな妻」があり、彼女は夫を、十分理解できないとはいえ、愛していました。彼は妻を、もう愛してはいませんでしたが、不憫に思わないではなかったのです。しかし、愛の喜びをわかちあう人が別にいるからには、欺瞞の上に夫婦生活を続けることも絶えられないのでした。喜びと悩みをともども深く感じないではいられませんでした。

ついに1904年7月、ドビュッシーは妻のもとを去り、旅に出た夫からひとり取り残されていたエンマと、手をたずさえてイギリス海峡にあるジャージー島に向かいます。この島で過ごした半月ほどの間に、かの〈喜びの島〉は作曲されます。しかし、喜びもつかの間、10月に、絶望した妻リリーが拳銃自殺を図ります。さいわい、弾が急所を外れて一命をとりとめますが、世間の非難がドビュッシーに集中します。富裕な銀行家夫人と一緒にいるために、苦勞をともにした妻を捨て、死を図るほどの絶望に陥れるとは何事か...世人は、ことの表面しか見ず、ドビュッシーを責めたてました。1905年にバルダック夫妻、ドビュッシー夫妻の離婚訴訟がようやく決着がついたときには、年来の友人の多くが彼の傍らから去っていきました。でも、その年の10月には女兒が誕生し、また、大きな喜びにつつまれます。クロード=エンマと名づけましたが、シュウシュウの愛称で呼び、おおいに子煩悩ぶりを発揮しました。

このように、大きな喜びと苦悩とが交錯する波乱の人生の中から、芸術は生み出されました。こうした背景を知ること、ドビュッシーの音楽の演奏や鑑賞の一助になるかもしれません。

参考文献

- 『ドビュッシー』平島正郎著 (大音楽家・人と作品 12) 音楽之友社 1987 <C17-692>
 - 『ドビュッシー』アントワーヌ・ゴリア著 店村新次訳 (不滅の大作曲家) 音楽之友社 1971 <C12-378>
 - 『ドビュッシーのピアノ作品』E.ロバート・シュミッツ著 大場哉子訳 全音楽譜出版社 1984 <C43-729>
 - Dietschy, Marcel. A portrait of Claude Debussy. Edited and translated from French by William Ashbrook and Margaret G. Cobb. Oxford, Clarendon Press, 1990. <C52-933 >
-

展示資料

図版パネル

資料より複製

ギリシア神話

ボッティチェリ《ヴィーナスの誕生》

1482～84年頃 フィレンツェ ウフィツィ美術館蔵
BOTTICELLI, Sandro(1444/45～1510)

ニンフのクロリスを抱いた西風ゼフュロスに吹かれて、ヴィーナスがいまや愛の島へ到着しようとする。右から走り寄るのは、時と季節の女神ホーラ(英語のアワーの語源)。この作品は、神話主題によって肉体の美しさを描き、15世紀イタリアでキリスト教の価値観の束縛から開放されるべく起こったルネサンスの新しい動向を代表している。

『世界美術大事典 5』(小学館 1988) p.236. <R703/SB/5>

古代ギリシア人のとらえた世界

古代ギリシアでは世界をこのようにとらえていた。中央部のペロペス半島とクレタ島との中間にある小さな島が、キュテラ = CYTÈRE (仏: シテール) 島。アプロディテ(ヴィーナス)が海の泡から生まれ、ゼフュロスに運ばれてたどり着いたとされる。

『ギリシア・ローマ神話事典』マイケル・グラント/ジョン・ハイゼル共著 入江和生等訳(大修館書店 1996) <R164/G>

現在の地図でのシテール島

現在の地図では、ギリシアのペロポネソス半島の南東にあるキティラ(Kithira)島が、ギリシア神話の世界のキュテラ = シテール島の位置にあたる。

『ベルテルスマン世界地図帳 日本版』(昭文社 1999) <R290.38/B>

ヴァトーの絵画

ヴァトーの自画像

ヴァトーの作品による銅版画(クレピ作)

ジャン＝アントワーヌ・ヴァトー Jean-Antoine Watteau(1684～1721)は、フランスの画家。木々の茂る庭園やのどかな田園での、優雅に着飾った男女の集いを描く「雅宴画」(フェート・ギャラント)というジャンルの創出者とされ、17世紀の古典主義にない斬新な内容を美術の歴史にもたらしした。

『ヴァトー全作品』中山公男編著(中央公論美術出版社 1991) p.154 <武蔵野美術大学美術資料図書館蔵>

ヴァトー《シテール島》

1709～10年頃 フランクフルト シュテューデル美術館蔵

ヴァトー青年期に描かれた作品で、シテール島を主題としてあつかった3点の代表作の内では最初期のもの。衣裳や人物の固さや構図が青年期を想定させる。また、舞台を思わせる照明、古風な衣裳、空間の構想などの特徴から、演劇の一場面を描いたような印象を受け、1700年と1709年に

パリで上演されたダンクール作『三人の従姉妹』との関連が指摘されてきた。

『ヴァトー全作品』 中山公男編著 (中央公論美術出版社 1991) p.12 <武蔵野美術大学美術資料図書館蔵>

ヴァトー 《シテール島の巡礼》

1717年 パリ ルーヴル美術館蔵

1712年にヴァトーがフランス王立アカデミーに迎えられることが決まったときに、会員資格作品の提出が宣告されたが、大幅に遅れて、1717年8月に提出された作品。アカデミーは、彼のために「雅宴画の画家」という新しい称号を設けた。前作に比べて、人物の表現様式に大きな変化が見られ、きわめて繊細な動きと感情の機微が表現されているのがわかる。ルーヴルのラベルは「シテール島への船出」となっている。しかし、この作品の主題が、「シテール島への船出」ではなく、愛の島からの帰還のための乗船であるとし、「愛の終わり」の暗示であるとするマイクル・レヴィ Levey, M.による有力な解釈もなされている。

この題名(シテール島の巡礼)は中山公男編著『ヴァトー全作品』に準拠させていただきました。

『世界美術大全集 西洋編 第18巻 ロココ』 坂本満編 p.34(小学館 1996) <R708/SB/18>

ヴァトー 《シテール島への船出》

1718~19年頃 ベルリン シャルロッテンブルク宮殿蔵

ヴァトーがジャン・ド・ジュリアンヌのために描いたとされる前作のヴァリエント。基本的な構図は同じであるが、ヴァリエントであるためのためらいのない素早い塗りのために、かなり色彩的な効果は異なっている。そして個々の部分で自由な模様替えがなされている。右端のヴィーナス像が生身の彫像風のものとなり、キューピッドたちのまわりつくカップルとバラの花を手にするカップルが加えられている。さらに、前作では、恋人たちの乗る船はゴンドラ風であるが、こちらでは、船の上に帆柱が立ち、キューピッドたちがピンクの帆を上げようとしている。題名は、「シテール島への船出」となっているが、果たして両者は同じ主題であるのか、それとも、ルーヴルのものが「シテール島への船出」であり、ベルリンの方が「シテール島からの船出」であるという仮説もたちうるのか、多くの疑問が解決されないままに残っている。

『ヴァトー[シテール島への船出] 情熱と理性の和解』 ユッタ・ヘルト著 中村俊春訳 (三元社 2004) 折り込み図 <J102-328>

文学

ボードレールの肖像

シャルル・ボードレール Charles Baudelaire(1821~1867)

パリに生まれ、6歳で父を失う。中学を退学処分の後、大学入学資格を得る。法科大学に席をおくが、文学青年たちと交わり学業を放棄。たった1冊の韻文詩集『悪の華』で近代詩の祖となった。彼の投じた「近代詩」への波紋はヴェルレーヌ、マラルメ、ランボーに、そしてロートレアモンへと拡がり、その後の世界の詩の流れを決定した。ドビュッシー等多くの音楽家にも多大な影響を与えた。

『ボードレール詩集』(海外詩文庫 3) 粟津則雄訳編 (思潮社 1993) カバー写真より <J76-555>

ボードレール『悪の華』より「シテールへの旅」

UN VOYAGE À CYTHÈRE 粟津則雄訳

日付不明の署名入り原稿があり、「ジェラルド・ネルヴァルに捧ぐ」との献辞が見られる。1855年6月1日付け『両世界評論』誌に「悪の華」18篇の一つとして発表された。シテールは地中海の小島で、かつてここにヴィーナスの神殿があり、甘美な愛欲の島として知られていた。ネルヴァルは『東方紀

行」の一節で、この島がいまは荒れ果てていて、近寄ると三本の腕のある絞首台が見え、その一本に死人がぶら下がっていたと書いたが、これはフィクションだといふ。詩人は、ネルヴァルに靈感を受け、絞罪人の姿に自己を投影して、近代人の苦悩を描いている。

『ボードレール詩集』(海外詩文庫 3) 粟津剛雄訳編 (思潮社 1993)P.56 ~ 58. <J76-555 >

音楽

ドビュッシーとエンマ・バルダック

Debussy et Emma Bardac a Pourville (juin 1904)

作曲家クロード・ドビュッシー Claude Debussy(1862 ~ 1918)は、1903年末か1904年の初め、ラウル・バルダックという作曲家志望の学生の母親としてのエンマ・バルダック夫人から晚餐に招かれる。1904年6月にエンマが彼に花束を送り、これに答えて『艶めくうたげ 第2集』を作曲して彼女にささげた時には、二人は互いに愛し合うようになっていたという。知り合った当時の二人はともに42歳。エンマは、すぐれた音楽家で、容姿に加えて知性と豊かな教養に溢れており、ドビュッシーは、全存在をかけて愛する女性をはじめて見出したのであろう。7月14日、ついにドビュッシーは妻の許を去り、旅に出ている夫から一人取り残されていたエンマと、手を携えて、イギリス海峡にあるジャージー島に向かう。ピアノ作品『喜びの島』は、ここで作曲された。この作品は、恋そのものと同時に、その愛の島をも歌いあげているとされる。

“Claude Debussy” by Francois Lesure (Iconographie Musicale IV) (Editions Minkoff, 1975) p.96-97 <X-051/1/4 >

フランソワ・クーブランの肖像

1735年にフリパール Flipart がアンドレ・ブイ Andre Bouys の絵画をもととして彫った銅版画

1735年8月のメルキュール・ド・フランス紙は、この版画の発行と発売を告げる際に、非常にうまくできていてよく似ていると記しており、この肖像から想像すると彼は、いかにも健康そうで意欲に満ちた風貌をしているが、実際には、毎日が身を削るような多忙さで、彼の健康は必ずしも満足すべきものではなかったとのこと。クーブランは、『クラヴサン曲集』第14組曲(1722刊)の(キュテラ島のカリヨン Le carillon de Cithere)で、シテール島で響く教会の鐘の音をクラヴサンで模倣してみせた。

『新版 クーブラン その家系と芸術』松前紀男著 (音楽之友社 1997)p.133 <C61-789 >

フランシス・プーランクの肖像

仕事上のパートナー、バリトン歌手のピエール・バルダックと一緒に撮った写真より

第二次世界大戦が終了し、プーランクは円熟期を迎えると同時に、「晩年」へとゆっくり傾斜していく。1948年11月から12月にかけて、ベルナックと初のアメリカ・ツアーに出る。アメリカでの成功は、新しい委嘱作品をもたらした。あまり映画の仕事は好きでなかったが、1951年、ピエール・フレネーとイヴォンヌ・フランタン夫婦がアンリ・ラヴァルの映画『アメリカ旅行』に出演するというので、音楽を引き受ける。この映画のために書いたスコアから、2台のピアノのための(シテール島への船出)というヴァルス・ミュゼットを抽出することになる。これは、後に2台ピアノのために書かれるいくつかの作品の先駆けとなるものであった。

『フランシス・プーランク』アンリ・エル著 村田健治訳 (春秋社 1999)p.101 <C63-484 >

展示図書

ギリシア神話

『ギリシア・ローマの神話 人間に似た神さまたち』吉田敦彦著

「天地のはじまりと泡の中で生まれた美女」という愛と美の女神アプロディテの誕生をめぐる物語から始まり、人間の女たちを次々と誘惑するゼウスなど、きわめて人間くさい神々と、その恋と冒険のドラマが、大変読みやすい話し口調で述べられている。省かれている部分も多いが、キリスト教的価値観とは対照的な西洋文化のもう一つの源泉をたどるのに好適な入門書。

(ちくま文庫) 筑摩書房 1996 <J95-029>

『ギリシア・ローマの神話伝説』 ・ ・ ・ 中島孤島編

古代のギリシア・ローマの神話伝説を集録したもの。「神話の起源および解釈」から始まっている。「原始民族が、この広大無辺の天地に目を開いた時、その単純な心に、いろいろな疑問が、雲のように湧いてきたであろう。世界はどうしてできたか？ 日と月と星とは、誰が造ったのか？...人間は、なぜ、死ぬのか？...そしてこれらの疑問に対する解答は、あるいは世界創造の物語となり、あるいは人間の祖先の物語となり...。」アプロジテについては、「アフロジテ(Aphrodite(羅)Venus)は、ある伝説では、ゼウスとジオネの娘だといわれるが、他の伝説では、海の泡から生まれたといわれる神で、愛と美の女神として、オリムポスの女神のうちで、誰よりも美しい女神であった」と述べられている。

(世界神話伝説大系 35,36,37)名著普及会 1981 <J41-584~586>

これらの展示図書の他に、次の参考図書がありますので、参考図書室をご覧ください。

『ギリシア・ローマ神話辞典』マイケル・グラント/ジョン・ヘイゼン共著 入江和生等訳

豊富な図版が嬉しい

木下亮図版担当 大修館書店 1996 <R164/G>

『図説 ギリシア・ローマ神話文化事典』ルネ・マルタン監修 松村一男訳

図版が豊富で、各項目ごとに関連する文学、美術、音楽作品が記されている

原書房 1997 <R164/Z>

『ギリシア・ローマ神話図祥事典 - 天地創造からローマ建国まで』水之江有一編著

北星堂書店 1994 <R164/G>

『ギリシア・ローマ神話辞典』高津春繁著

岩波書店 1971 <R164/G>

絵画

『ヴァトー【シテール島への船出】 情熱と理性の和解』ユッタ・ヘルト著 中村俊春訳
この本は、シテール島を主題としたヴァトーの絵画3点に対して、あらたな解釈の光を投げかけた論考である。男女の恋愛を描き出したヴァトーの絵画には、じつはひそかに、彼の時代に支配的であった国王の宮廷や貴族階級の文化と対立する、市民階級の文化モデルが呈示され、市民的な愛の理想が描かれていると強調する。訳者解説には、1961年に発表されたマイケル・リヴィー M. Levey による衝撃的な解釈 パリとベルリンの作品に描かれているのはシテール島への「出発」ではなく、そこからの「帰還」であると主張 についても、反論も含めて解説されていて、興味深い。
三元社 2004 <J102-328>

Evans, Gary. Music Inspired by Art; a guide to recordings

リスト、ムソルグフスキー等の19世紀の作曲家は、絵画からインスピレーションを受けた作品を多く残している。このような絵画と音楽との緊密な関係に着目し、ロマン派のみならず、古典からポピュラーまで幅広いジャンルの音楽に影響を与えた絵画と音楽作品の録音(CD,LP)を、画家の人名別にリスト化した画期的な参考図書。巻末の Composer Index により、作曲家から探すことも可能。Watteau, Antoine の項目には、ドビュッシー、プーランクの作品の他、シャルパンティエ「ヴァトーに寄せるセレナード」やミヨー「人生の喜び ヴアトーをたたえて」等が載せられている。

(Music Library Association Index and Bibliography Series, No.30). Lanham, The Scarecrow, 2002 <X-060/E>

文学

『悪の華』ボードレール著 安藤元雄訳

1857年6月、発売と同時に検閲にあい、風俗壊乱の罪に問われた『悪の華』。ボードレールの投じた「近代詩」への波紋は、ヴェルレーヌ、マラルメ、ランボーへと拡がり、その後の世界の詩の流れを決定したとされる。この集英社文庫は、『悪の華』全篇と『禁断詩篇』を1篇ごとに丁寧に脚注をつけながら訳出している。訳者安藤元雄による巻末の解説は『悪の華』成立の経緯を知り、どう読むかについての示唆を得るのに役立つ。ウィリアム・モリスのデザインによるカバー文様も魅力的。

(集英社文庫) 集英社 1991 <J75-897>

『ボードレール詩集』 粟津則雄訳編

フランス文学をはじめ、美術、音楽にも造詣の深い粟津氏の訳編によるボードレール詩集。『悪の華』から55編、『パリの憂鬱』から21篇の訳詩のほか、T.S.エリオット「ポオドレエル」、イーヴ・ボンヌフォワ「悪の華」、安東次男「詩その沈黙と雄弁」といった詩人論、作品論も収められ、ボードレールの詩的世界を形作る多種多様な要素にできる限り触れられるように配慮されている。この本の中の粟津則雄訳「シテールへの旅」を展示パネルとして紹介させていただいた。

(海外詩文庫 3) 思潮社 1993 <J76-555>

『ボードレール詩集』 佐藤朔訳

フランス文学者佐藤朔氏の訳、解説によるボードレール詩集。ナダル撮影のボードレール、1885年の写真が掲載されており、活字も行間も読みやすく工夫されている。解説では、ボードレールの生涯や性格がわかりやすく述べられている。

(世界詩人選 2)小沢書店 1996 <J83-179>

音楽

『新版 クーブラン その家系と芸術』 松前紀男著

パリ郊外のブリBrie地方に、すでに14世紀に根づいていたとされる音楽の才に長けた家柄、クーブラン家の人々を広範な人間史、文化史の中でたどって、“生きざま”を追求しながら音楽のルーツを探ろうとする労作。著者による写真を含む豊富な図版や譜例から、綿密な考察ぶりがうかがえる。「第8章 王宮と閨房の音楽」の中で、次のような記述が見られる。「クーブランの描いた楽園に対して、王がうなづきながら満足気に賛意を表す姿が目に見えるかのようだ。それはちょうどワトーが、名画『シテールへの船出』の中で描いたような、楽園への楽し気な船出でもあった。」また、「第9章 クラヴサン」の中で、(キューテラ島のカリヨン)についての記述がある。

音楽之友社 1997 <C61-789>

『パリのプーランク その複数の肖像』小沼純一著

横断的な眼差しで「音楽文化論」を志向する著述活動を展開する小沼純一氏によって、プーランク生誕百年に際して書き下ろされた評伝。「シテール島...」については、次のような記述がある。「(シテール島)は当然アントワーヌ・ワトーの高名な絵画の題名だが、ここでは回顧趣味的なひびきではなく、船出の浮き立つような気分を醸そうとしているのか、ヴァルス＝ミュゼットのスタイルをとっている。プーランクについて、或るひとはこのロココ時代の画家がのこした有名な「ジル」*というタブローとよく似ていると述べたものだが、果たして作曲家はこの形容を知っていたらどうか。」

*『ヴァトー全作品』の編著者中山公男氏によれば、一般的に『ジル』の題名で取り扱われている等身大の人物を描いた大作『ピエロ』は、ヴァトーが私たちに遺した最上の作品でもあり、最大の謎でもある。不思議なほど「無垢」の魅惑を発散し続けるこのピエロは、ヴァトー自身の自画像ではないにしても、仮託された自画像という印象を否むことはできないとのこと。

春秋社 1999 <C64-108>

『フランス・プーランク』 アンリ・エル著 村田健司訳

プーランクの深い信頼を得ていた評論家アンリ・エル著“Francis Poulenc: Musicien Français”の全訳。1993年にプーランクの全貌を日本語で紹介する最初の本として出され、1999年に生誕百年に際して新装版として再版された。「プーランクの音楽をひと言で定義すると、それは「天性(ナチュラル)」という言葉を使わざるを得ない。」と評している。「シテール島への船出」についての記述は見られない。

春秋社 1999 <C63-484>

ドビュッシーに関する図書

当館に 173 点ほどあるドビュッシー関係の図書から、特徴あるものを数点、展示してご紹介します。

Vallas, Leon . Debussy(1862-1918)

フランスの音楽学者レオン・ヴァラ(1879-1956)によるドビュッシーの伝記。数あるドビュッシー伝の内、最初のもの。ヴァラは音楽批評家として、1903 年には (Revue musicale de Lyon) 誌(1920 年には改題して (Nouvelle revue musicale) と改題)を創刊した。専門分野はあらゆる時代のフランス音楽で、ドビュッシー、ダンディ、そして師にあたるフランクに関する著作は、豊富な知識と全く独自の考え方によるものと言われる。当館には、この本のほかに“Claude Debussy et son temps” <C7-018>、その英訳 <97-585> 等多数の著書を所蔵している。この本には、ヴァラ自身の署名がある。

Paris, Librairie Plon, 1927 <C3-971 >

Holmes, Paul. Debussy. (The illustrated lives of the great composers)

バッハからヴィヴァルディまで 29 人の作曲家について、豊富な図版を用いて伝記的に紹介するシリーズの内の 1 冊。この「ドビュッシー」も、他では見られないような関連図版が豊富に掲載されている。「7 章 さらなるスキャンダル」(p.72-73)で、ヴァトーの絵と「喜びの島」について述べているが、ヴァトーの絵画は恋人たちがアプロディテの島から離れるところであり、ドビュッシーの愛の島への逃避行とは相対する象徴としてインスピレーションを得たのだとしている。

London, Omnibus Press, c1989 <C51-577 >

Dietschy, Marcel. La passion de Claude Debussy. (Langages)

スイス人 Dietschy(1915-1981)によって 1962 年にフランス語で著されたこのドビュッシー伝は、最も権威ある評伝の一つとされてきた。丹念な未発表資料の調査に基づいているが、音楽学的というよりは、ドビュッシーの複雑なパーソナリティを伝える要素の方が強いとされる。第 16 章 L isle joyeuse(p.166-180)で、「喜びの島」について、詳述している。

Neuchatel, A la Baconniere, c1962 <C3-980 >

Dietschy, Marcel. A portrait of Claude Debussy.

Edited and translated from French by William Ashbrook and Margaret G. Cobb.

Dietschy によって 1962 年にフランス語で著された本“La passion de Claude Debussy”の英語訳。単なる英訳ではなく、訳者二人によって、原著出版以降約 30 年間の研究成果を踏まえた改訂もなされている。巻末の作品目録は、原著者による作品名のアルファベット順リストにルシュール Lesure の目録“Catalogue de l'oeuvre de Claude Debussy”< X-044/D289/L >の番号が付加されている。「喜びの島」については、「ヴァトー作『シテール島への船出』とは表現されている世界が異なり、むしろ、1902 年にサロンに飾られていたベナール*作『幸福な島 Ile heureuse』に類似している」(p.134)として、ヴァトーの絵から靈感を得たという定説に疑問を投げかけている。

Oxford, Clarendon Press, 1990. <C52-933 >

*ベナール Besnard, A. (1849-1934)は、フランスの画家。折衷的な作風により裸婦、風景、肖像などを手がけたが、とくに建築装飾の分野に力を注ぎ、成功を収めた。1874 年にローマ賞受賞。“Ile heureuse”は未見。

Nichols, Roger. Debussy. (Oxford studies of composers, 10)

イギリスの音楽学者ロジャー・ニコルズによるドビュッシーの音楽の分析的研究。音楽史の流れの中で、各楽曲の位置付けがなされている。「喜びの島」については、55-57 頁に「海」とともに解説されている。

London, Oxford University Press, 1973. <C21-121>

『ドビュッシーとピアノ曲』 マルグリット・ロン著 室 淳介訳

Marguerite Long 著“*Au Piano avec Claude Debussy*”(1960)の全訳。訳者曰く、「この本はまことにふしぎな本である。ドビュッシーの音楽についてのたんなる批評文でもなければ、たんなるピアノ技法の本でもない。…」フランスの<よき時代>の最後の頃を生きたピアニスト、マルグリット・ロン(1874-1966)がドビュッシーから直に聞きえた、彼のピアノ作品の演奏についての指示と、伝記と批評を合わせたような挿話とが配置され、ドビュッシーに対する愛情の芯が終始貫いている。「喜びの島」については、「パリではじめて「喜びの島」の勉強は、ドビュッシーの病気がすでに重かったにもかかわらず、いっしょにつづけられることになりました。ドビュッシーは自作品の中でもとくにこの曲を重要視していたようです。…この曲はワットの「キテラへ向かっての船出」をモデルにした作品でした。」という書き出しで、7頁を割いて述べられている。

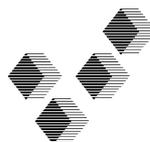
音楽之友社 1981 <J101-602>

Lesure, François. Claude Debussy. (Iconographie musicale IV)

1923 年生まれのフランスの音楽学者、司書のルシュール編集の「音楽図像集成 Iconographie Musicale」第4巻。ドビュッシーに関する図像を集めたもの。ルシュールはパリの国立図書館の音楽部門で20年間司書を続けた後、65年、ブリュッセルの自由大学の音楽学教授となり、73年には高等研究員で研究指導者となる。研究分野は、主として音楽社会学、16世紀フランス音楽、ドビュッシー、各時代の書誌学である。この本の中の、図 87、88「ブルヴィルでのエンマ・バルダックとドビュッシー」の図版をパネルにして展示した。

Geneve, Editions Minkoff, 1975 <X-051/1/4>

参考図書です。当日貸出ご希望の方はお申し出ください。



展示楽譜

18 世紀の作品

オペラ・コミック

Le Theatre de la Foire, ou L'Opera comique, Tomo IX. II. Partie.

Paris, Gandouin, 1737 pp.489-534 所収 <M6-575>

L'Amour desoeuvre, ou Les vacances de cythere.

「役立たずの愛の神 あるいはシテール島の休日」

1734 年初演の全一幕のオペラ・コミックの台本。

内容は、シテール島に憩うヴィーナスとキューピッドの所に次々と色々な人物が「愛の相談」に訪れるが、いずれも「お門違い」のため、ヴィーナスから「門前払い」に遭う。最後に、ヴィーナス好みの土官が登場するが、彼は戦争の意欲に燃えていて、ヴィーナスとはどうも話が合わない。そこに、ヴィーナスの夫の軍神マルスが、配下の者どもを引き連れて登場して、皆で教訓めいた合唱をして、大騒ぎの内に終わるというストーリー。

内容については、笠原潔先生のご協力をいただきました。御礼申し上げます。

クーブラン「シテール島の鐘」

Oeuvres completes de Francois Couperin. IV. Musique de clavecin III.

Publiees par un Groupe de Musicologues sous la direction de Maurice

Cauchie. Paris, Editions de l'Oiseau Lyre, 1932 <S11-043>

Troisieme Livre de Pieces de Clavecin. Quatorzieme Ordre.

Le Carillon de Cithere 「シテール島の鐘」

1722 年に出版された〈クーブラン全集〉の第 4 巻 = 〈クラヴサン曲集〉第 3 巻の復刻版。

オルガン曲・室内楽曲・声楽曲を含めて全 12 巻のこの全集は、パリのロワゾー・リール社が、1932 年より翌年にかけて出版した。この中の第 14 組曲の中に〈キュテラ(シテール)島の鐘〉が含まれている。

ガリアード社 ブラームス・クリサンダー版

Couperin. Pièces de Clavecin Livre 3(part 1) Revises par Brahms & Chrysander

London Galliard, Augener 19-- <G4-394>

ロンドンのガリアード社から 1888 年に出版されたブラームスとクリサンダー校訂の楽譜の復刻版。

最初の実用版としての意味は大きい。指使いや表情記号はついていない。

デュラン社 ディエメル版

Couperin, Daquin, Rameau. Clavecinistes francais. 1er volume Vingt Pièces choisies. Transcription par Lois Diemer.

Paris, Durand 1962 <G12-642>

クーブラン、ダカン、ラモのクラヴサン曲を集めたディエメル校訂版。装飾音は記号を用いず、奏法どおりの小音譜で書かれている。

リコルディ社 モンターニ版

Le piu belle pagine dei clavicemblisti francesi.. a cura di Pietro Montani..
Milano, Ricordi, c1956 < G12-653 >

リコルディ社から出された、クーブラン、ラモー、ダンドリュール等フランスのクラヴサン曲を集め、モンターニにより校訂された楽譜。

ブダペスト Zenemukiado Vallalat 社 バルトーク版

Couperin Valogatott zongoradarabok=Ausgewählte Klavierstücke.

Budapest, Zenemukiado Vallalat, 1964,c1955-57 < G13-872 >

クーブランのクラヴサン曲集、第1 4巻抜粋。各頁、バルトークによる細かい指示が記されている。

マスター・ミュージック出版社 バルトーク版

Francois Couperin(1668-1733) Eighteen selected pieces. Ed. by Béla Bartók.
Masters Music Publications, 1989. < G23-118 >

クーブランのクラヴサン曲集の抜粋。ブダペストで1924年に出版されたものの復刻版。

バルトークによる丁寧な校訂つき

シャーマー出版社

Couperin harpsichord pieces. Ed. by Lois Oesterle, with an introduction by
Richard Aldrich.. (Shirmer's library of musical classics)

New York G. Schirmer, c1904, c1932 < G22-540 >

表情記号が細かくつけられている。

E . F . カルマス社

Francois Couperin. Harpsichord Pieces.

New York, Edwin F. Kalmus, 19-- (Kalmus piano series) < G4-418 >

プーランク・ブラックウッド

プーランク「シテールへの船出」

Poulenc, Francic. L'embarquement pour Cythère. (Valse-Musette pour pianos)
Paris, M.Eschig, c1952. < G9-368 >

パリのエシーク社より1952年に出版された楽譜。2台ピアノ用。浮き立つようなヴァルス・ミュゼット。プーランクの署名入り。

当館ではこの出版社の楽譜のみの所蔵です。複本 : < G9-372, > < G20-193 >

ブラックウッド「シテールへの旅」

Blackwood, Easley. Un voyage à Cythère op.20 for soprano and ten players.
Poem by Charles Baudelaire

New York, Shirmer, c1967. < E1-571 >

ブラックウッド Blackwood, Easley (Indianapolis, IN, 21 April 1933 ~) はアメリカの現代作曲家。この作品は、ボードレールの詩「シテールへの旅」に音楽をつけたもの。1966年に作曲され、1967年にシカゴ大学で初演された。ソプラノとフルート、ピッコロ、オーボエ、クラリネット、バス・クラリネット、バスーン、トランペット、ホルン、トロンボーン、コントラバスで奏される。作曲家の自筆譜のファクシミリ版。

ドビュッシー

ドビュッシー「喜びの島」

<ドビュッシー全集>

デュラン社

Oeuvres Completes de Claude Debussy. Serie 1, Volume 3. Ed. by Roy Howat.
Paris, Durand, c1991 < A9-985 >

デュラン社から1985年より刊行が続けられている「ドビュッシー全集」。このシリーズ1:ピアノ曲の第3巻に「喜びの島」が掲載されている。巻末のクリティカル・ノートは、仏語版と英語版がある。付録として、作曲者のスケッチが付けられていて、どのように構想を練ったのかがわかり、興味深い。

デュラン社

L'isle joyeuse. Pour le piano.
Paris, Durand, c1904 < G4-805 >

デュラン社から1904年に出版された実用譜。

ヘンレ社

L'isle joyeuse. Urtext. Mit einem Vorwort von Francois Lesure. Fingersatz
von Hans-Martin Thepold.
München, G.Henle, c1986 < G20-934 >

ヘンレ社から1986年に出版された実用譜(原典版)。「ドビュッシー作品目録」の編纂者ルシュールによって1986年に書かれた序文が付けられている。

ペーターズ社

L'isle joyeuse. In "Klavierwerke VI" Ed. by Eberhardt Klemm.
Leipzig, Peters, c1973 < G16-050 >

ペーターズ社から1973年に出版された実用譜(原典版)。編者クレムによって1972年に書かれた序文が独・仏・英語で記されている。

Broekmans & Von Poppel 社

L'isle joyeuse. Pour piano seul. Edition originale.
Amsterdam, Broekmans & Van Poppel, c1968 < G4-787 >

オランダのBroekmans & Van Poppel社から1968年に出版された実用譜(原典版)。

インターナショナル・ミュージック社

L'isle joyeuse. For the piano.
New York, International Music company, 19-- < G4-728 >

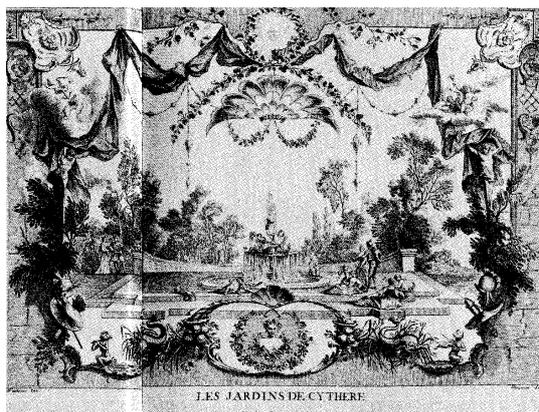
アメリカのインターナショナル・ミュージック社から出版された実用譜。

この他にも9点ほど実用譜がありますので、OPACで検索して、ご利用ください。



図書館展示 10月 2004

喜びの島 シテール島
神話・美術・文学そして音楽



〈シテール島の庭園〉ヴァトーの原画による版画

2004.10.29 編集 国立音楽大学附属図書館広報委員会・高田涼子・染谷周子